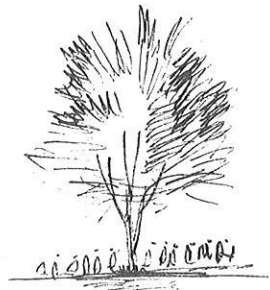


光の子



No.89 2000. 12. 1

- わたしを尋ね求めるものは見いだし、心を尽くして求めるものは、
出会うであろう…と主はいわれる。(エレミヤ 29:13-14)



「おおきいねひまわりさん」

え・中島英子

「新幹線」

新幹線のぞみ号先光る夏

新幹線ひかり号秋光るなり

青空は青田のこだま新幹線

新幹線やまびこひかるさくらんぼ

北へ走らす新幹線青葉号

夕焼けへ向かふ特急赤城ゆき

札幌道お花畑の駅に降り

落合 水尾 (『浮野』主宰)

実りの秋に



暑かった夏も、いつの間にか過ぎ去り、木々も色鮮やかにその姿を変え、秋が深まり行くこの頃です。

今年度、私は担当者の役割を離れ、長い子どもで十三年、短くは三ヶ月寝食を共にした子どもたちを新しく加わった職員にお願いしました。月日の経つのはあっという間であることを実感させられました。

担当していた子どもたちを引き受けてくれた他の職員たちや新任の担当者たちにとって、どんな大変だったかと思います。また担当される子どもたちもどんなに不安だったでしょう。可能な限り担当を替えないで関係を作り深めることは、家庭に代わる生活の場での基本です。

私たちの仕事の生命線に関わる、人との関係は、避けられない職員の退職、子どもの入退所で入れ替わり変化を余儀なくされます。

新任職員が三名に増え、私が担当から離れ、高校卒業生が三名となった今年度のスタートは緊張のスタートでした。入進学に伴う学校での環



境も大きく変わるので、家ではゆったりとした安心感が最も必要な時期でもあるのです。

そんな今年度も半年が経過し、折り返しの時期になりました。大きな困難な一山を子どもたちと共に乗り越え、落ち着いた、それぞれの特色の鮮やかな担当グループや家になってきたのを感じています。

四歳の和希ちゃんが今日も声をかけてきました。なんだかニコニコしています。初めて乳児院に面会に行つた時の遊んでいるときも、表情が硬い、緊張したひとときを思い出します。来てからも、細い体で、「生活」を拒否し、仲良くすることを、叩く蹴る、噛みつくことで拒否しました。

それでも、数週間、三ヶ月と暮らす中で、甘え、楽しむことが出来るようになった子どもでした。

このごろ、和希ちゃんの笑顔が、上品になった、笑い方が担当者にそっくり、と評判です。安心して来年度幼稚園に入園できる可能性も大きくふくらんできています。

竹花 信恵

高校卒業まで後一年というときに、担当者が退職し替わった将司。この家の歴史と共に大きくなり、私たちの関わりの失敗も彼が負っているかのように、同じマイナスをつまらないうところで表現し、社会に向けてのラストパートを切る事が出来ません。それどころか、勝手な暮らしに埋もれて行くばかりの毎日に、大人の空回りしそうな「対応」は、彼に届きませんでした。その重苦しさの中、同級生で共にここで育つた、一見クールな萌季が立ち上がり、子ども集団が一致団結して彼を私たちのなかに引き戻しました。

ひとり、またひとりと、それぞれ私たちの手の届かないところにいつてしまった仲間たちへ、彼女の思いは関わった者たちのすべての者たちへの熱い思いであり、忘れられない重さと共に、友情が確かに育つていくことを、私たちに確認させてくれました。

先日、ある研究会で「担当者でなくなつて寂しくないですか？」と聞

かれました。すでに何回か同じことを聞かれ、その時の心の状況によって答えも変わってしまいます。子どもが新しい関係の中で育ち始めたのを感じ始めたとき、私は一足先におばあさん気分でした。寂しさよりなんといつても、子どもの表情に安心感と嬉しさの方が多い毎日を送れています。といつても、のどかな気分浸れるのは、もう少し先のこともかもしれません。

今日も、新しく可愛い仲間が加わりました。たくさん子どもがここを必要としている社会の状況は、一体どうなっていくのでしょうか。どうして一番小さく、弱い子どもが、こんなに不安な中で、傷ついて辿り着いてくるのでしょうか。おそらくもっともっとたくさんさんの問題が、これから出てくるのでしょうかと確信してしまふそうです。

一人では子どもを育てられないのと同じように、私たちだけでは全力を尽くしても、足りる訳はありません。せめて、私たちのところに安心してきてもらえるような家にしていくことを願い、それを可能にしてきて下さった多くのご支援者の方々に感謝しつつ、更にその輪を広げられるよう微力を尽くしたいと思っています。

学もどきのつづき ④

山奥の温泉宿で

山形大学医学部

部長 仙道 富士郎

時計を見ると、三時であった。医局旅行で山形の山奥の肘折温泉に泊まっている。

昨夜は何故か数が少なくなくてしまった医局員、しかも四名の女性群とバン格拉デッシュからの留学生は泊まらずに帰ってしまふという、いまだかつてない淋しい宴会ではあった。

でも、この温泉から小一時間のところの新庄市に開業して四年になるT君が駆けつけてくれて、宴は少人数にもかかわらず盛り上がり上がった。

途中九時近くになって小生は座ったまま居眠りをしてしまったらしい。酒好きの小生にとって若いときには考えられなかったことだが、最近

は時々こんなことがある。特にリラックサスして酒を飲んでいるときに起こるようである。

目を醒ましたのを見計らって、幹事は宴会を閉じた。部屋に帰ってT君を含めて十二時頃まで談笑した。

それからすぐ寝入ってしまったのだが、二時間ちよつと目が醒めてしまった。こんな睡眠障害が最近よくある。老人の早朝覚醒というのだそう。眠ろうと努力することを諦めると、色々なことがらが、頭に浮かんで消えていく。

一昨日つまらないことで秘書に大きな声を出してしまい、なんと四十才に手の届く女性を泣かせてしまった。当然のことながら、それ以降彼女は暗い顔をして、小生に種々と抵抗する（ように小生には見える）。自分のしたことが原因ではあるのだが、遊びに来てまで小生が話し出すと彼女が黙りこくってしまうのは、閉口してしまった。あまり楽しいものではない。

まあそんなことはそのうち消えていくとして、学部長になってからは種々と孤独を味わわされている。小生があまり一生懸命にやろうとしすぎるのか、まわりの人間はあまり乗ってこない。

T君に忠告された。

「先生あまり急ぎすぎると失敗するよ」。そうなのかもしれない。医学部構成員のinteractionをはかるのが大切と考えて、看護部、事務部等を含む納涼会を企画した。

会場が狭すぎるのではと心配したが、案に反して、参加申し込みは淋しいものであった。とくに助手層からの参加は主催者の小生と病院長の医局を除けば、ゼロであった。この結果は淋しいと言うよりも、若い人達のしつけムードを反映しているようにも見え、医学部の改革なるものが、若い人達に内在するエネルギーに依存しなければならぬことを考えると、前途多難であることが予想され、少し減入ってしまうのだ。

でも昨日はとっても楽しいこともあった。T君の自宅を兼ねた診療所に寄ったことである。

少年が玄関に出てきて挨拶をしたのち、小生たち来客者の履き物をきつちりとそろえて並べてくれ、客間のソファに皆が座ると、冷たい麦茶のサーヴにとりかかったのである。

T君の奥さんが学校の行事のことで留守であったことから、母親に頼まれたのではあるが、なんとも見事である。さらに嬉しかったのは少年の目が私たちに対応しているあ

いだ、キラキラと輝いていたことである。それは、のびのびと成長してきたことの、証拠であると思った。奥さんの愛くるしいにこやかな顔が浮かんで消えた。夜も明けてきて、少し明るい気持ちになり、風呂場に降りていった。

露天風呂から望まれる空は夏空で今日も暑くなるらしい。



プ・リ・ズ・ム

原田家日記

この夏休みは長く暑かった。
今年の夏休みに入る前に順が、「夏休みはたくさん楽しいことばかりだね。」と、目を輝かせて言ってきた。「山にも行けるし、海にも行けるし・・ね。」期待で胸がいっぱいの子だった。

確かに夏休みはたくさん行事が子どもたちのために用意されていて、その準備に取りかかっている頃だった。教会学校の夏期学校のキャンプ、小学生グループの八ヶ岳登山、お盆には帰省できない子どもたちのための湯河原町の有志のご招待での海水浴・・。

正直言って、うだるような暑さの中での行事の連なりには気が滅入るような思いもしたのだが。しかし、自分の子どもの頃を振り返ってみると、ここの子どもたちと同じように楽しみに待っていて、父や母が時間や経済をやりくりしながら存分に楽しませてもらったという思い出がいっぱい詰まっていることに気づかされた。

た。それなのに・・いけない！

ひとまず、子どもの頃にかえって、子どもたちが大人になっても忘れないような夏休みにするために出来ることは力一杯していこう、と心に決めて迎えたことがはるか昔のことのように今思える。

この夏も多くの方々のお支えで、存分に子どもたちを楽しませることが出来ました。少々の疲れと充分な手応えを残して。

神田 幸枝



光の中で

佐藤家

うだるような暑い毎日だった夏休みも終わり、実り多い秋になりました。

私が光の子どもの家に来て初めての夏休み、それは長いようで短い、そして子どもたちの意外な一面を見

ることの出来た夏休みでした。

今年幼稚園に入園した花子は、夏休みを元気に楽しく過ごそうというオーブンングパーティーの日に四〇度の熱を出し、寝込んでしまいました。傍で寝ていた私も案の定、夏風邪が伝染り二人とも体調を崩しての夏休みスタートとなりました。

しかし、花子の姉である小学二年の美季は、毎日元気に朝六時に起きてラジオ体操、ジョギングを続けました。一見弱そうな美季ですが、本当にがんばっていました。教会学校のキャンプの山登りでは、泣かずに登り切りました。小学生グループが毎年お世話になっている谷本清光画伯の阿登久良山荘への三泊四日の旅での本格的な八ヶ岳への登山も、帰りに大雨という悪コンディションにも関わらず、最後までがんばることが出来ました。

途中泣いてしまうこともあったようですが、諦めずに自分の力で歩き通したのです。私もその行事には参加していましたが、体調が万全でないもので、登山には参加できませんで

した。どんなに困難でも、願ったことを最後までやり通すことのすばらしさや大切さを改めて美季に教わったように思います。

来春高校を受験する福子は、希望校合格を目標に、部活引退後毎日勉強にがんばっていました。しかし、しかし、夏休み最後の日に私にそつと渡してくれた手紙に、「悔しい」という文字がありました。それは、もつと勉強をすればよかったという思いを持っていたのです。勉強を過ぎたということはないでしょうが、「頑張っていたけれども」と頑張れたのではないか」という思いだったのです。現状に満足していないで、もつと上をめざす心の福子に出会えたことに幸せな思いになり、私も、と思わされた夏休みでした。

感謝して励みます。市川 美穂



河のほとりで 倉澤家

今年も夏休みがやってきて、世の中のお母様方の中には、四〇日も子どもが一日中家にいてうんざり！という方もいるのではないだろうか。実は私ため息をついて迎えることがあった。しかし今年の夏休みは少々違っていた。

中二の幸子は毎日暑い中での厳しい練習に参加。部活動にまじめに取り組んだ夏休みだった。高一の沙慧と高二の亜希は幸い(?) 厳しい練習のある部活に所属していなかった。夏休みはほとんど家で過ごしたが、この二人が我が家の家事を本当によくやってくれた。

掃除、ゴミ捨て、草取り、買い物、調理、後かたづけ・・と、私が不在でも不便を感じない生活が出来るよう大きく成長していたのである。それに加えて、沙慧はアルバイトを初体験し社会を少し拡大することが出来た。初めて手にした給料で家のメンバーにお土産を買ってくる心遣いも出来るようになっていた。

亜希は湯河原行きの行事に参加し、職員顔負けの働きをしてくれたという報告まで聞くことが出来た。ということ、倉澤家の夏休みは

高校生たちのおかげで実に快適であった。

数年後に追った「社会的自立」の輪郭を確かめることが出来たような気がする夏休みであった。

倉澤 智子



子どもたちの季節

仙道家



秋も深まってきました。子どもたちの好きな落ち葉焚きの季節です。

さて、この夏、仙道家に新しい仲間が加わりました。

河西由子、五歳です。藤本グループの裕と同じ年です。

ずっとお母さんと一緒だったのに、お母さんの病気で急に離ればなれ。

どんなに寂しく不安だったことでしょう。毎日、朝、昼、夕と食前にはしくしくと泣いていました。また、みんなと一緒に食事はしませんでした。入浴も着替えも嫌がります。

初めの頃は、体全体でここの生活拒否し、不安を表現していました。そんな時、由子の心に寄り添い、一緒にいてくれたのは、担当者の私ではなく、子どもたちでした。由子も子どもたちにだんだんとなついていきました。

みんなと一緒に食事が出来なければ、由子のいる廊下に食事を持っていき、食べさせてやったり、着替えを用意し「出来るかな?」と、励ましたり、と由子の不安を理解し、思いやっていました。

一番困ったのが入浴でした。プールに誘っても、魅力は感じ側に行きますが、入りません。そうして一週間、二週間と過ぎていきました。

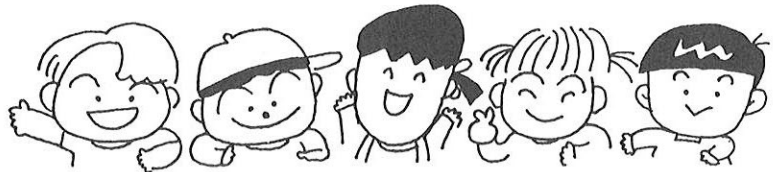
不潔で病気にでもなったら大変です。ついに施設長が作戦を考えてくれました。それは、施設長がうまく由子を抱っこして、一緒にプールに浸かり全身を濡らしてしまい、その後担当者が「菅原先生イヤね」なんて言いながらシャワーをする、ということです。後から抱き抱えられた由

子は嫌がり叫びました。そしてプールに浸かる段になり泣き出しました。が、何とかシャワーをすることが出来るようになりました。そんなことを二、三回施設長が頑張ってくれて、入浴は問題なく楽しむことが出来るようになりました。

ただ、由子にとって施設長が「とてもイヤな人」になってしまいました。担当者が・・。

担当者といっても特別何が出来ると訳ではありません。子どもたちや周りのスタッフたちに、「担当者」にしてもらっているんだなと、改めて思わされた夏でした。

池田 祐子



現場から

続・光の子らしく

②

岩崎 まり子

すっかり秋が深まってまいりました。それにしても、今夏の暑さは、また格別の厳しさでした。皆さま、いかがお過ごしですか。

こう暑い夏は食欲がなくなるのも、もつともな話で、時折遊びに来る卒園生の筆も、「現場から帰ってきて、暑いし、疲れてるし、食う気しないっすよ。」と言っていました。冷凍バナナを勧めたのですが、どうでしょうか。

さて、『夏を制する者は受験を制す』を合い言葉に日夜(?)学習に励んでいるのは萌季です。

二歳半で光の子どもの家に移ってきた彼女が、もう高校三年生になっていることを思うと、月日の流れの速さと同時に、親でもないこんな私

担当者としてずっと抱えてきていることに対する〈重さ〉を思わずにいられません。

高校生になって以来、これまでの間、進学したいという意志を持ちながらも、経済的なことや自分と家族とのことなど一筋縄ではいかないこととたくさん悩み、話し合いを重ねてきました。

ときに、「もうやだ。もういい。考えなきゃいけないことが多すぎるよ。」と目を潤ませ、投げやりになっ

てしまうこともありました。自分の思いだけではどうにもならない現実。誰に何を援助してもらえないのか、それが果たして妥当なことなのか、自分はどうしたいのか、分からなくなっても仕方のない環境だろうと思います。十六年という長い



年月をかけて創ってきた、プラスマインナスを含めての人間関係を改めて見つめ直す作業は、本人にとってはなかなか厳しいものもあっただろうと思います。

それでも、彼女の代わりに悩んだり、答えを出すことはできません。

今でも時折、奨学金の返済額の大きさに圧倒された時など、「やっぱり、やめた方がいいのかな」と、弱気の虫に塞がれることもあります。自分の進路を見つめ、「普通」に近づく努力を続けているところです。

何ができるわけでもない私ですが、いざとなったらできる限りのことをして応援していきたいと思っています。

それが、今日までの関わりの責任であるとも、また、自然の成り行きのようにも思うのです。

今年の夏も、お盆帰省できなかった子どもたちが湯河原へお邪魔しました。今年は特に多くて、これまで最高の大人と子どもとで総勢十九人という大人数でしたので、「お邪魔する」という表現がびつたりの三泊四日を過ごさせていただきました。

萌季もずっとレギュラーで参加していたので、いつもお家をお借りする府川さんも覚えていくくださり、



いつまでも、どんなときも、小さな背中を応援し続けていこうと思っています。

萌季にも感謝の思いを忘れないで欲しいと思いますが、他の誰よりも、わたし自身が応援者の多さに励まされているのです。

帰ってきて本人に伝えるとニコニコ笑い、「覚えてくれたんだ。」と嬉しそうでした。

いろいろな方々に切れない関係を創ってくださるようお願いしてきました。普通の家庭より実習生やボランティア、見学者などの数分出会いの数は多いのですが、切れない関係というのはむしろ少ない子どもたちです。だからこそ、ずっとつながって下さっている方々の応援は、いざというとき心強いものだろうと思います。ありがとうございます。

帰り際「萌季ちゃんにもよろしく伝えてよ。頑張ってた。」と言付かりました。こんな離れたところでも、萌季のことを心に掛け、応援してくださる方がいるかと思うと、本当に胸があつくまりました。

養護メモ 83

流れ

菅原 哲男

児童養護施設は、社会福祉施設のなかで最も古い歴史を経過してきた施設の一つである。

特に、戦前までの、制度もないなかで、生活に困窮し、捨てられた子どもたちなどを、見過ごしにできずに、家に連れ帰って暮らすという、厳しい労苦と精神性に満ちた開拓的なはたらきをしてきた群像が児童福祉のさきがけとなったものであった。

特に、一八八七年、石井十次が創設した岡山孤児院は、打ち続いた東北地方の凶作などによって生み出された孤児たちなどで、一九〇六年には一二〇〇人の規模にふくれあがった。その時、生活の単位が大規模なことからくる養育上の非常に困難な問題を解決するために、その生活単位を「長幼を混同したる自然的な」家族的単位に改めて、「友愛の情を髓に」わき出させるなどの質的向上をめざして小舎制養育を開始し、他にも里預制度も実行して子どもたちのよりよい養育をめざしたのである。このことは、菊池義昭(共栄短期大学)先生の研究に詳しい。

現在のわれわれの想像をはるかに

超えた困難を、前傾姿勢で受けとめ先駆けてきたもので、その働きには身の引き締まる思いがする。

そのように、大正、昭和初期までの子どもたちの社会的養護は、個人的な真情や熱意、あるいは哲学・信仰に根ざした働きによった『志の時代』といえるものであった。

先の敗戦による新たな国家建設の流れのなかで憲法の制定、児童憲章、児童福祉法など次々に打ち出される法的整備がなされ、対応しながら今日に至っている。

今日、全国に児童養護施設は五五四カ所設けられ、光の子どもの家はその中の最も新参なのである。

戦後の混乱期に、戦災・引き揚げ孤児などの浮浪児対策に力のあった大規模施設による収容保護を目的にして、児童養護施設の半世紀はそのままに経過したのである。これは、公的な責任による合法性や効率性を旨とする政策遂行と相俟っていると思える一連の流れなのである。

大規模収容施設が主流をなしていた中でも、通常の建物で、子どもたちが失った家族的な関係を形成する

ために心を砕き困難を引き受けてきた小規模施設(以後小舎制という)の運営を続けてきたささやかな『志の時代』をくむ流れもあった。

その潮流が、全国の施設長などの有志によって構想された「小舎制養育研究会」が、一九七五年、名古屋市中で立ち上げられたのである。

以来、小舎制養育研究会は、困難な問題を抱える子どもたちへの処遇の具体的なあり方、特に被虐待児童に対する効果的な関わりなど、社会的養育のよりよいあり方についての地道な研究活動を、志だけを集めながら展開してきている。

一九八四年、小舎制養育研究会の主要メンバーなどが資生堂社会福祉財団の委託を受けた小舎制養育(グループホーム)のあり方と欧米五カ国の社会的養育の比較研究を行うべく準備をしていたところ、当時の全養会長など幹部によって、このグループへの委託を中止するよう財団に申し入れるなど積極的な阻害行為を受けながら現在に至っている。もちろん、その研究は初期の予定通り遂行されて、有用な報告書二編が編まれて公開されたのだが。

そして今、戦後五〇余年、新しい流れが始まりつつあるのである。昨年度末頃、厚生省の専門官から、

児童養護施設における新しいメニューが必要だ、政策内容作成に力を貸してほしいという話があった。小舎制養育研究会がこれを受けることで鋭意寄与してきた。

本年一〇月より、定員六名の児童養護施設を地域において通常の建物で展開するという夢のようなメニューが全国一〇カ所で始められている。

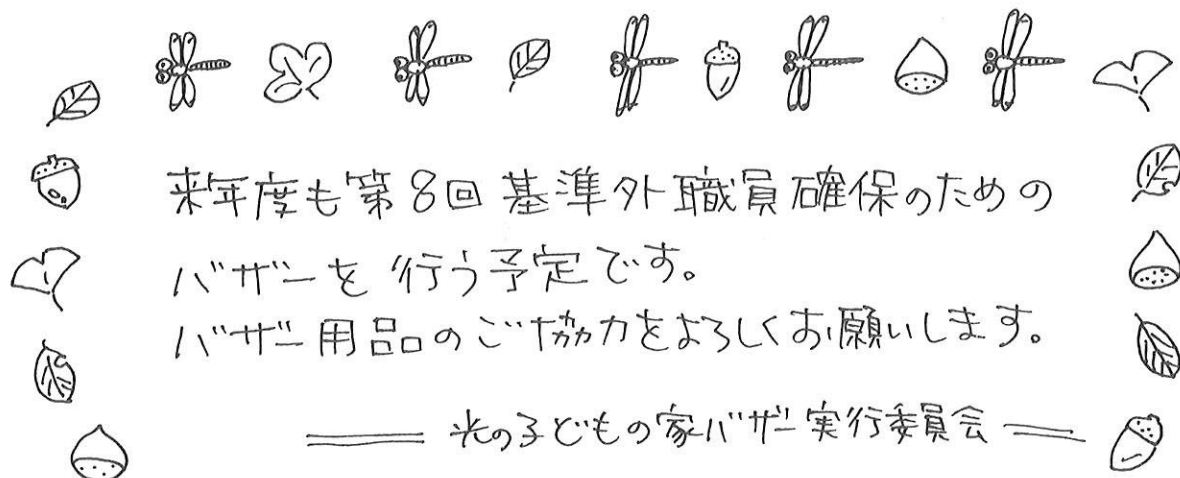
子どもを育てるということは、どんな豊かな状況においても困難な営みなのである。効率第一では叶わないはたらきなのである。

新しい地域小規模児童養護施設においては、担当者の労苦は計り知れないのである。朝から夜まで一人格が子どもの生活を整えていくことにかかる働きの質量は、大きな学校のような施設で交代するやり方とは大きな開きがあるのである。

それ故に、光の子どもの家では、共に働く人々を雇い入れた労働者という概念を可能な限り捨象して、共に経営・運営していく仲間として位置づけてきている。

関わる大人たちの質的な平等を保障し、機能の違いをお互いに尊重し合っていくのである。

協働する者たちの相互に尊敬の念がないところに、人を愛する働きは成立しないのであるのだから。



日誌抄 = 子どもと創る暮らしの風景 =

4月1日 ▶ 5月末日

4月

幼児6名 小学生7名 中学生6名 高校生9名
年齢超過1名 措置外1名
1日 新年度 服部沙絵子 市川美穂 梶原完着任 職員会議
光の子どもの家子ども家庭支援センター事業開始
○ 林碧日本大学 佐藤東京国際大学入学式
2日 北東埼玉教会福島記念館で聖日礼拝開始
6日 新高校生 進学記念の秩父民宿へ 決意の確認と高校
生活への心構えに
7日 入進学祝 新築の福島勲記念館集会室にて にぎやか
に 楽しく そして決意も新たに
8日 幼稚園入園式 2名入園
10日 原道小学校へ1名 大利根中学校へ1名 県立高校へ
3名入学式
17日 群馬県子持山学園より研修3名 脇谷美津代氏も
18日 10年程前に学習指導の東京田中博正氏ご子息来訪
21日 光の子どもの家後援会役員会
23日 菅野圭樹博士来訪して診療と職員へのご助言
28日 東大宮教会学校教師と光の子どもの家職員の協議会
今月の物品ご寄贈者 関東商事 栗橋町黒沢自動車
タカラブネ 大宮市古川恵 町内大塚吉春 株式会社
オオタニ 橋本千代 カモメ文具店 本宮隆司の各位
様より ありがとうございます。

5月

5日 第16回子ども祭り 地域のお友達や教師 教会関係
者 卒業生のほとんどなどが駆けつけて楽しい一日
10日 後援会 赤十字奉仕団の構内整備ご奉仕 感謝
19日 埼玉県神愛ホーム3名見学研修
24日 光の子どもの家後援会総会大利根町長など来訪
29日 江森ヘヤーサロン散髪ご奉仕 いつもいつも 感謝
30日 第60回理事会 事業報告・予算を承認
今月の物品ご寄贈者 関東商事 はむこ会 町内羽鳥昌平 小島
明美 伊藤真美 有馬一栄 平井シゲ 遠藤侃子 南條とよ子 妹
尾直彦 藤幼稚園 吉沢華子 加納幸雄 今成満子 千葉県村瀬
喜美江 葉円台教会 内田まき 東京都高橋一子 村瀬多恵子
土信田隆 小山田貴子 長谷川八千代 黒田俊雄 (株) たちは
な出版 三重県花見松子 桶川市向後俊彦 東松山市柳瀬美江
久喜市島田彩子 渋谷澤 久喜俳句会 加須市増田 若柳慶雅
若柳慶久美 市川千代子 坂本和加子 増田月苑 島崎なぎさ
岡美子 網取八重子 鎌田和子 岡部井竹子 横村スミ子 梅沢
三保 栗原一子 梓沢あずさ 騎西町斉藤良子 菖蒲市 豊国道
江 坂戸市加藤唱子 蕨市田中和子 杉戸市田村明美 羽生市松
本明子 所沢市長田美沙子 大宮市東大宮教会 (株) モトイ
種苗 栗橋町栗橋キリスト教会の各位様

来月行われる第6回大バザーのために多くの方々の応援を
頂きました。記載漏れはお許し下さい。心から感謝(くら)

反 射 光

☆子どもたちが最も輝く時期の夏休
みの報告がこんなに遅れ申し訳ありま
せん☆多忙に加えて少々スランプ状
態を経験しました☆気分が落ち込み
無気力な夏から秋を過ごし重ねてお
詫びします☆毎年のように、当たり
前のように光の子どもの家の子どもた
ちを受け入れ、励まし、支えて、す
ばらしい夏休みを提供下さる方々の
スランプなどを見聞したことがありますま
せん☆重ね重ねお許し下さいますよう
に☆世紀末もどん尻となり、この国
の先行きの見えなさは一層深まります
☆どのようにして子どもたちに希望を
もたらし真っ直ぐに成長するよう伝え
るべきかたじろいでありまします☆大き
な曲がり角に立っている児童養護施
設の状況もそれに拍車をかけます☆そ
れでも、子どもたちは元気な子でわれ
の希望であり続けます☆そんな子ども
たちをもっと大切に受け入れていく元
気も、彼らのひたむきさなどから受け
ます☆気力充実が最も必要な時代で
す☆皆さまのご支援にお応えできるよ
う励みます。

(哲)